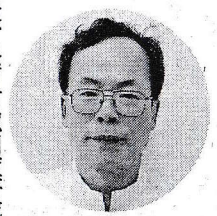
ちばオピニオン

私論直言

独居高齢者を支える

「1人暮らしあんしん電話」の試み

医療法人緑星会理事長
堂垂　伸治氏



◇どうたれ・しんじ　1948年、富山県出身。東京大学工学部卒、千葉大学医学部卒。千葉西総合病院などを経て、99年どうたれ内科診療所開業。千葉大学医学部臨床教授、松戸市認知症研究会会長、松戸市医師会在宅ケア委員会委員長などを務める。

私は松戸市で開業している内科医。近隣に「孤独死ゼロ作戦」を展開している有名な常盤平団地がある。松戸市では2002年から孤独死の正確な人数を発表している。その調査から次のような事実がわかった。

自宅で亡くなる人の4人に1人が孤独死だった。最近10年間で死亡者数は1・4倍に増加していたが、孤独死はさらに多く2倍。孤独死の増加率は図らずも独居高齢者の増加率と同じだった。今後、独居高齢者は激増するので孤独死もそれに比例して増えることが予測される。

孤独死の人数は、現在全国で約3万人といわれている。独居高齢者は、全国で10年に480万人、35年には1・5倍の762万人に増える。

独居高齢者の45％が孤独死を身近に感じている。孤独死は、家の価値が下がるなどの社会経済的損失や、死体臭がまん延するという公衆衛生的問題がある。URなどの集合住宅で問題視されているが近代的な超高層マンションでも発生する。

私は、日常診療や地域のケア会議を行う中から、「独居高齢者を何とか効率的に支える仕組みがないか」と模索してきた。

周知の通り、日本は1千兆円を超える債務があり、国民1人当たり800万円を超える借金大国である。無駄な費用や人手をかけない合理的なシステムが必要である。

そこで、08年3月から大学やIT企業と共同で「1人暮らしあんしん電話」というシステムを開発し運用してきた。

これはパソコンに診療所側の問いかけの音声を録音し、対象者（1人暮らしの人）と毎週1回あらかじめ約束した日時に自動的に電話をかける。対象者はプッシュホン式電話（携帯も可）で、「問題なし」の場合は「＊1」を、「体調不良」は「＊2」を、「要連絡」は「＊3」を押す。

応答結果はパソコン画面に一覧で表示され、診療所側は朝夕にチェックし対応する。安否確認をする側の〝手間が省け〟、対象者もボタンでの返答なので〝気兼ねせず〟回答できる。システムは電話の受け手では受信のみなので、料金が発生しない。発信する診療所側では100人相手でも月1万円以内で済み、1台の機器で数百人を対象にできる。

松戸市内では現在、5カ所の医療機関などに設置され、十数カ所の町会・自治会で総数約400人を対象に稼働している。各地域のボランティアなどと連携し、1人暮らしの人の見守り、支援を行っている。

松戸市医師会が13年から後援し、地域住民からは「松戸あんしん電話協議会」という町会・自治会の横断的な組織が生まれた。今年度から松戸市が補助事業とし、行政公認の事業となっている。

全国各地の医療機関、地域包括支援センターなどにこのシステムが導入され、周辺地域住民を見守るシステムになることを期待している。「地域包括ケア」体制を補完、充実させると確信している。

本システムをきっかけに、地域で「新たな人と人のつながり」が形成されている。さらに地域住民と専門職の交流、連携がつくられてきた。病状や体調の悪化を先取りし孤独死を予防し得る。万が一孤独死になっても2週間以上放置されることはない。

最後に、このシステムでは「＊4」を「御用聞き」にすることも可能である。一般企業でもぜひとも運用を検討してほしい。